

映画『カーサ・エスペランサ』 の示すメキシコと米国の近く で遠い関係

経営学部
丸谷雄一郎

『カーサ・エスペランサ』は2003年に米国で制作された映画である。しかし、その舞台はメキシコのアカブルコらしきリゾート地であり、米国から来た6人の女性が話す英語以外はほぼ全編スペイン語の映画である。監督は『フィオナの海』のジョン・セイルズであり、主役6人の女性キャストは豪華で、『スプラッシュ』の人魚役を好演したダリル・ハンナ、『モナリザ・スマイル』のマギー・ギレンホールなど演技派で固められている。

内容は、原題 *Casa de los babys* (邦題のサブタイトルともなっている『赤ちゃんたちの家』) が示すように、米国から来た6人の女性が養子候補の暮らす『赤ちゃんの家』となっている修道院のあるリゾート地で、養子縁組の手続きを待つ状況を描いている。

近年、『トラフィック』『アモーレス・ペロス』『フリーダ』などメキシコの多様な側面を扱った秀作が多く公開されてきたが、この作品は映画の出来という点では素晴らしいものとはいえない。キャラクターの多さがストーリーとしての面白みや深さをなくし、展開もどことなく単調で、盛り上がりにも欠ける。しかし、この映画のこうした欠陥はみようによっては魅力となっている。万人受けはしないが、多様な断面を切りとっているだけに、メキシコや中南米に関心を持つ人にとっては議論の糸口となりうる映画なのである。

この映画が描く構図は米国とメキシコの貧富の格差を基盤としている。つまり、豊かな米国人が

貧しいメキシコ人の赤ちゃんを養子に求めるという構図である。しかし、この一見単純な構図は米国から来た6人の女性とそれを取り巻くホテルで働く人々を多様な側面から描くことによって、複雑な問題を訴えかける。6人の女性はこれまで不妊のために多くの傷を負っており、養子をもらいたいという目的以外には共通点はほとんどない。そして、映画の中では、彼女達が互いの母親としての適切さや人間性を辛らつに議論しあう部分が多く描かれ、これまで背負ってきた傷を会話の中から垣間みることができる。

彼女達が泊まっているホテルの女性オーナーは養子縁組のシステムをうまく利用し、営業を行っており、このシステムを必要悪と捉えている。彼女は養子を斡旋する事務局との対応を行っている弁護士と裏でつながっており、その弁護士も事務局とつながっている。彼女達は養子手続きを引き伸ばすことによって、米国女性の長期滞在を余儀なくさせているのである。そのホテルで働くメイドの1人は自分がかつて養子に出した子供を、次々と現れる養子を持つ女性客を見ながら思い出し、自分の子供が良い生活をしているようにと祈っている。また、ホテルのメンテナンスを行なう従業員は、一般の多くのメキシコ人が持っている米国への苛立ちを、酔ってはあらわにしながら彼女達のために施設の修理をする。

彼女達は養子を待ちながらリゾート地を観光するのだが、そこで出会う人々の中にも多くの社会



メキシコの子供達

(写真は上智大学増山久美さんより提供いただきました)

的矛盾が描かれている。彼女達の周りには常にストリートチルドレンの姿がみられ、彼らは赤ちゃんを求める彼女達と接点を持ちながらも、日々の暮らしのために犯罪に手を染め、その生活の厳しさゆえに、シンナーに走る。また、彼女達をガイドする人の好い男性は不景気のために失業し、米国への出稼ぎを望み、その元手となる資金を稼ぐために宝くじに夢を託すが、その夢はかなわない。さらに、彼女達の1人をなんばする青年はメキシコの高所得階層の内気な娘を妊娠させるが、そのことすら知らずなんばを続け、妊娠した彼女は生まれた子供を修道院から養子に出すことになる。

映画はたった1時間半の中にこのようにたくさん的人物を登場させ、多様なエピソードをちりばめることによって、メキシコと米国の近くて遠い関係を描き出している。米国は今やメキシコ人を中心とするヒスパニック社会なしに動かなくなってきたおり、どこにいてもスペイン語での説明がなされるようになってきている。実際に、メキシコを訪れて現地の人にインタビューしても親戚の誰かが出稼ぎにいたり、ある意味ですごく近い関係になっている。

私が研究対象としている小売産業に限ってみても、メキシコの最大の小売業者はウォルマートであるし、米国のスーパーマーケットにはメキシコの食材が必需品として置かれている。このように、メキシコと米国との結びつきが密接になっているのもかわらず、互いの価値観が尊重されているかどうかということを考えれば疑問符が付く。

NAFTA（北米自由貿易協定）によって国内の格差が拡大したメキシコ社会において、恩恵を受けているのは一部の人々であり、映画の中で描かれた多くのエピソードも、こうした近くて遠い関係の不均衡な歩み寄りの一端を示しているように思われる。すでに述べたように、この作品をエンタテインメントとしてとらえると疑問符が付く。しかし、それぞれのエピソードは多様な問題を提起しており、十分に見る価値があるといえる。

石敢當と山羊汁

経営学部

矢田 博士

一、はじめに

この夏、沖縄に行ってきた。初めて沖縄の地に足を踏み入れて気づいたことは、沖縄には、日本本土、少なくともこの辺りでは、ほとんど目にする事のない独特の風俗・習慣が数多く見られるということだ。沖縄は観光地として有名なところなので、すでに行ったことがあり、ご存知の方もいるかと思われるが、一方では、まだ一度も行ったことのない人もいるであろうから、この機会に、私がそこで見たり聞いたり、あるいは後で調べたりしたことを紹介してみたいと思う。ただ、その全てを紹介するのは紙幅の関係から無理があるので、その中から最も深く印象に残った「石敢當」と「山羊汁」を対象を絞ることとする。

二、石敢當

沖縄の道を歩いていると、——と言っても、私が訪れたのは沖縄本島的那覇市の「国際通り」、初日に宿泊した宜野湾市、国頭郡にある「沖縄美ら海水族館」、知念村にある「齋場御嶽」、そしてその東の海上に浮かぶ「久高島」に限られるのであるが、——直進して丁字路の突き当たりにはさしかかったあたりで、必ずといってよいほど、「石敢當」という文字に出くわすのである。正確に言うと、「石敢當」と刻まれた石の碑が突き当たりの正面の塀の前に置かれていたり、あるいはその